



澤崎 賢一 Kenichi Sawazaki

1978 年生まれ。アーティスト・映像作家・キュレーター・リサーチャー

人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 基盤研究部 特任助教

京都市立芸術大学大学院美術研究科博士（後期）課程修了 博士（美術）

連絡先：texsite1206(アットマーク)gmail.com

・専門領域：芸術実践論

・研究キーワード：現代美術, ドキュメンタリー映画, マルチモーダル人類学, 学際研究/超学際研究,
：科学技術社会論, 環境人文学, 庭, ムスリム

映像を中心とした現代美術をベースにしながら、新たな芸術文化パラダイム創造のために、積極的に異分野や異文化の人々と共同でプロジェクトを行っている。また、それらのプロジェクトの成果や効果を芸術実践と学術研究の両観点から検証・考察している。

澤崎が中心となり創設された学際的なプロジェクトとして、映像メディアの学際的活用の基盤となるプラットフォーム「暮らしのモンタージュ」、プロジェクト「ヤングムスリムの窓：芸術と学問のクロスワーク」、共同研究プロジェクト「センサリー・ダイアログ：アートとサイエンスの共創のための場の創出」、人間文化研究機構 共同研究プロジェクト「イマジナリー・ダイアログ：映像・AI・芸術による参加型「問い」創出の学際実践」がある。それらのプロジェクトを進めるプロセスにおいて、彼はマルチモーダルなメディアを活かした仮説的な方法を自ら参画者と共に実践している。

主な展示・作品に、展覧会「語りかける庭」(有斐斎 弘道館、京都、2025)、展覧会「すべてのものとダンスを踊ってー共感のエコロジー」(金沢 21 世紀美術館、2024-25)、ドキュメンタリー映画『#まなざしのかたち ヤングムスリムの窓』(43 分 41 秒、2023、マダニ国際映画祭プレミア上映)、多重層のドキュメンタリー映画『#まなざしのかたち』(124 分、2021、東京ドキュメンタリー映画祭「長編コンペティション部門」選出)、劇場公開映画『動いている庭』(85 分、2016、第 8 回恵比寿映像祭プレミア上映) など。

主な論文に、Kenichi Sawazaki, Kae Amo, Yo Nonaka et al. " Emergent Use of Visual Media in Young Muslim Studies" TRAJECTORIA Vol.5, National Museum of Ethnology, Japan, 2024., 澤崎賢一「暮らしのモンタージュフィールド研究の余白ー」(対話型学術誌『といたうとい』Vol.0, 京都大学学際融合教育研究推進センター, 2021)、主な助成金に、トヨタ財団個人研究助成 D16-R-0344「暮らしの目線」に見るフィールド研究の感性ー映像メディアを活かす超学際研究の表現形の探究ー(2017-2019 年度) など。



映画『#まなざしのかたち』撮影風景@ブルキナファソ(西アフリカ)

私にとって、**展覧会、映像作品、プロジェクト、そして独自の方法論の開発は——表現のかたちこそ違えど——同じ線上にあるひとつの実践**です。このポートフォリオでは、**〈センサリー／イマジナリー・ダイアローグ〉**と**〈メタ／コモンズ映画〉**を核に、「問いが生まれ、共有され、育っていく場」をどのように設計しているかを紹介します。そこでは、撮る／撮られる、語る／見る、制作／研究といった境界がほどけ、参加者の感覚・想像・記憶が交差するポリフォニックな構造が立ち上がります。方法そのものを生み出し更新する行為は、それ自体が挑戦的な表現であり、同時に研究創作（リサーチ＝クリエーション）として理論・記述・教育へと還流していきます。

■実践のコア

〈メタ映画〉——「見る」を素材化する編集

制作・試写・議論で得られた気づきや沈黙を、ボイスオーバー／字幕／画面構成（分割・反復）として作品に折り返し、観察と解釈が同じ画面内で往復するように編集する方法です。『語りかける庭』では、ズレ・沈黙・反復を構成原理とし、複数の語りやカメラの視点を重ねて、単一の説明に回収されない開かれた解釈の場を提示します。併走する論考（査読論文やエッセイ）と相互参照させることで、制作と理論の間に循環を生み、批評そのものを編集の一部として組み込みます。

事例：映像作品『#まなざしのかたち』、映像作品『語りかける庭』

〈コモンズ映画〉——素材を「みんなの場」にする運用

参加者全員が撮影者／編集者となり、素材を共有資源（コモンズ）として扱う制作方法です。共同編集セッションや小規模の公開試写を重ねて、複数の立場の編集判断を作品に刻み込みます。「ヤング・ムスリムの窓」では、当事者編集や多声的編集を通じて、表象の倫理を更新し、制作過程そのものを社会にひらかれた対話として位置づけています。

事例：プロジェクト「ヤングムスリム窓」

〈センサリー・ダイアローグ〉——無意識の手がかりを意識化する対話

触覚・聴覚・身体感覚・匂い・温度などの「言葉になる前の気づき」を共有し、行為→記述→小編集の短い循環で共同編集へつなげる対話設計です。ねらいは発話を補うことではなく、対話の質を意図的に変化させること。ふだん無意識に読み取っている姿勢・呼吸・視線・間・音景・微表情といった非言語の手がかりを、身体の配置や触れる順序、記述のレイヤー化といったプロンプトで増幅し、意識化します。評価より観察、正解より差異の発見を重んじ、学際的な場で埋もれがちな微細な経験を立ち上げます。

〈イマジナリー・ダイアローグ〉——可能性にとどまり続ける

企画や研究が「実装される前」の揺らぎを、あえて留め置き・可視化し・再編集可能にするための運用です。参加者は仮説や懸念、まだ形にならないアイデアを議論し、そこから生まれたイメージを短いシナリオ断片や図解、仮編集映像として提出し、互いに引用・再配置して複数案を並走させます。ここでは結論を急がず、矛盾や未決の部分を「次の編集の余白」として残すことを価値化します。

これらの試みは、国際共同研究や学術発表とも連動し、制作と理論、個とコモンズ、ローカルとグローバルを媒介します。このポートフォリオでは、その往還を「作品＝方法／方法＝作品」として提示しています。

澤崎 賢一

暮らしのモンタージュ ／ #まなざしのかたち

■「暮らしのモンタージュ」とは

「暮らしのモンタージュ」は、映像をみんなで考えを持ち寄る作業台として使い、調査・制作・鑑賞を行き来させる学際的なプラットフォームです。農学者や人類学者のフィールド調査に並走し、そこで見過ごされがちな「知の余白」——語られなかったこと、沈黙、身体の変和、視線の交差、日々の小さな知恵や驚き——を逃さず撮り、短い編集→小さな試写→対話→再編集の循環でみんなで扱える素材へ育てます。私は創設者として、映像を単なる補助資料ではなく、問いを生み、関係を編み直すための場へと転地させる運用を設計してきました。

■背景にある考え方

未来社会を形づくるヒントは、華々しい出来事よりも、暮らしの些細な工夫や驚きに潜むことが多い。研究者にとってもそこは学びの源泉ですが、成果はしばしば専門的な場でしか共有されません。そこで私たちは、学術の「余白」に追いやられがちな潜在性を、映像と対話の往復で手に引き寄せることを目指しています。映像は情報の器にとどまらず、人が反応し、考えが立ち上がる過程そのものを扱える媒体です。だからこそ、短い編集バージョンを複数つくり、その場の反応や沈黙を記録して次のバージョンへ折り返す——この反復とバリエーションの運用がコアとなります。

■使っている手法

〈メタ映画〉：試写や上映の場で生まれた気づき・違和・沈黙をボイスオーバー（ナレーション）や字幕として作品内部に折り返す自己言及的な編集。観察（一次層）と解釈（二次層）が画面の中で往復し、ズレ、沈黙、反復がノイズではなく設計された形式として立ち上がります。

〈水平的モンタージュ〉：同一のシークエンスに異なるボイスオーバーを並置し、一義的な物語の流れに縛られない見え方を開くための方法。撮る側／撮られる側、語る側／見る側の境界がゆるみ、調査者は「当事者でも非当事者でもない」位置に身を置くこととなります。そこで立ち現れるのが〈あいだのまなざし〉——複数の視点が交差し、まだ名前のない感覚が輪郭を得る瞬間——であり、私たちはそれを具体的な映像編集によって可視化します。

■実装の中心

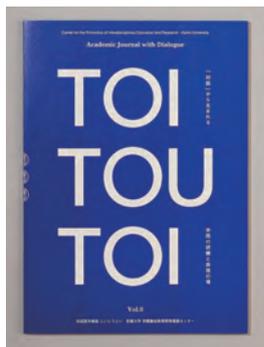


多重層のドキュメンタリー映画『#まなざしのかたち』

（監督：澤崎賢一，124分，2021年）

ケニア、ブルキナファソ、タンザニア、ベトナム、日本各地の調査に同行し、撮影と並行して小さな試写と対話を重ねました。そこで出た声をナレーションや字幕として作品に戻し、撮影者の語りと編集・鑑賞者の語りを二つの声として行き来させています。結果、現場に潜む感覚的な知や観察者の揺れる立ち位置が、画面の中で問いを開く仕掛けとして働くことを示しました。

- ・東京ドキュメンタリー映画祭「長編コンペティション部門」選出。
- ・ウェブページ：<https://livingmontage.com/manazashi/>
- ・映画の本編：<https://vimeo.com/712334241>



査読付き論文「暮らしのモンタージュ — フィールド研究の余白」

（対話型学術誌『といたうとい Vol.0』 pp.82-89,

京都大学学際融合教育研究推進センター，2021年6月）

映画での運用を概念と言語で支えるのが本論文です。記録映像を「情報の容器」ではなく、人の反応や考えが立ち上がるための共有の場として位置づけ直し、調査者が置かれる境界的な位置から生じる〈あいだのまなざし〉を記述しました。さらに、水平的モンタージュの短編実例を紙面のQRで提示し、紙面（記述）と映像（編集）を互いに補い合う形で再現可能性と教育的応用を高めています。ここで示したのは、従来の民族誌的記述が取りこぼしがちな“余白”を、映像と対話の往復手続きとして扱う方法です。

- ・PDFリンク：<https://livingmontage.com/wp/wp-content/uploads/2023/04/toitoutoi-kyoto-uni.pdf>



映画『#まなざしのかたち』より



・短編映像『#まなざしのかたち 雨上がり、水平的に、ストリートにて』(監督：澤崎賢一, 10分, 2021年)
映像リンク：<https://youtu.be/ailLpFhtYdM>



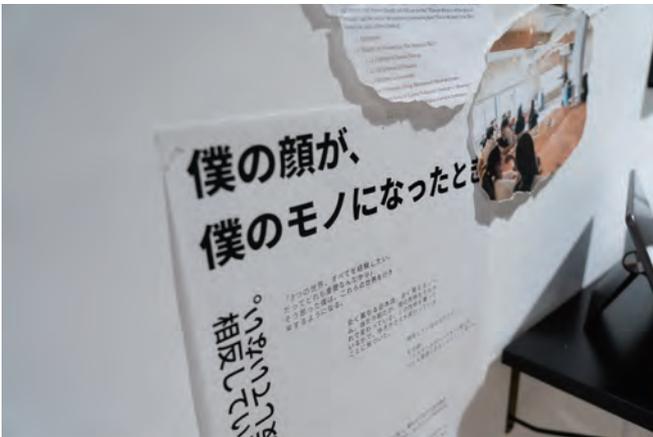
■査読付き共著論文：Kenichi Sawazaki, Kae Amo, Yo Nonaka, Shuta Shinmyo, Mamoru Hasegawa, Ahmed Alian, Yunus Ertugrul, “Emergent Use of Visual Media in Young Muslim Studies,” *TRAJECTORIA* Vol.5, 2024

https://doi.org/10.51002/trajectoria_024_02

■映画『#まなざしのかたち ヤングムスリムの窓』
(監督：澤崎賢一, 43分40秒, 2023年)

映像リンク：<https://youtu.be/1cZCPTBKsyk>

■展覧会「ヤングムスリムの窓：撮られているのは、たしかにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？」
(京都精華大学サテライトスペース Demachi, 京都, 2023年)
展覧会アーカイブページ：<https://project-yme.net/exhibition2023/>



展覧会「ヤングムスリムの窓：撮られているのは、たしかにワタシだが、撮っているワタシはいったい誰だろう？」
展覧会会場の様子

動いている庭／語りかける庭

庭づくりを「自然を制御する技術」ではなく、変化に応答し続ける実践として捉え直す連作です。日仏の庭師の作庭実践を映像と展示を通じて可視化、「庭」を通じて「自然との共生」を再考する試みです。1.『動いている庭』で見る足場をつくり、2.『語りかける庭』で声を並置し、計画中の3.『結びつける庭』で関わりそのものを作品化します。



1.『動いている庭』— 風景・作業・語りが交差する (監督：澤崎賢一、85分、2016)

できるだけあわせて、なるべく逆らわない—これは、ジル・クレマンの庭師としての基本的な態度である。この言葉にそってつくられた本作は、日本各地を訪問するクレマンと、彼の自宅の庭をロングショットで記録した民族誌的な映像です。「自然に逆らわず、共に生成する」クレマンの哲学を過度に説明するのではなく、観客が自ら思索するための導線をつくりました。

- ・恵比寿映像祭プレミア上映／全国で劇場公開
- ・映像リンク：<https://vimeo.com/698079188> (PW: fG7KqWiT)
- ・公式ウェブサイト：<http://garden-in-movement.com>

2.『語りかける庭』— 同じ庭に三つの声を並置する (監督：澤崎賢一、41分18秒、2025)

展覧会「語りかける庭」(有斐斎弘道館)に合わせて制作。京都・観音寺の庭をめぐる、住職／作庭家／研究者の語りを同一の庭景に重ねて提示しました。各語りは、何に注目し、どの順序で語り、どの時間スケールで捉えるかが異なります。こうした焦点・語彙・時間感覚のずれをそのまま並置することで、同じ風景が複数の読み方を帯びる過程を可視化しました。展示運用は小上映→対話→再編集の循環を採用し、会場で更新される版の変化を来場者と共有しています。

- ・企画：澤崎賢一、エマニュエル・マレス(日本庭園史、京都産業大学 准教授)、原瑠璃彦(日本庭園・能・狂言、静岡大学 准教授)
- ・映像リンク：<https://vimeo.com/1104628069/9c83d9f4f0>



■表象文化論学会 学会誌『表象 20』査読中

論文『「語りかける庭」における〈メタ映画〉の創造性

——対比・共鳴・ズレが生むポリフォニックな解釈の可能性——

作品と展示の実践を、「対比：異なる語りを同一のショット／庭景に並置」、「共鳴：語り・映像・沈黙・視線の反応関係を採用」、「ズレ：一致しない解釈や順序の差を保持」という三操作として言語化。二声ナレーション／字幕層／沈黙の扱い／会場での再編集とバリエーション管理を最小プロトコルとして整理し、教育・研究への転用手順を提示します。

■今後の計画として

『結びつける庭』—「庭」の哲学を、映像×AI×展示で「関わりの作法」へ翻訳する

日仏の庭師、ジル・クレマンと古川三盛に通底する「環境に应答し、自己を前面に出さない作庭」の態度を、映像・AI・展示空間で検証し、鑑賞から“関わり”へ踏み出すための具体的な作法を提示するプロジェクトです。目標は、作者が一人に収束しない(非自己中心的)創造の実践と、その教育・研究への実装です。計画の核は次の三点です。

1. 往復書簡×既存映像の再編集で、思想と身体が交差する瞬間を立ち上げる。
2. 研究協力者エマニュエル・マレスのAIアバターを媒介者として設計し、翻訳=連結の働きを可視化する。
3. 映像・書簡・アバター・写真・語りを同一空間に配し、来場者の参加と再編集が循環する展示を行う(2027年度想定／3Dスキャン連携)。

なぜ今か(背景)：クレマンの「できるだけ合わせてなるべく逆らわない」、古川の「庭は芸術ではない。主張しないことが大切」という姿勢は、環境に「耳を澄ます」倫理と創造の在り方を示します。本計画はその精神を、今日のメディア(AI・デジタル空間)へ翻訳し、人間中心的な創作観を相対化する批評的実践として位置づけます。



展覧会「語りかける庭」展覧会会場の様子

センサリー・ダイアログ

■プロジェクト「センサリー・ダイアログ：アートとサイエンスの共創のための場の創出」

この研究プロジェクトは、科学研究における知の生成プロセスにおいて、従来見過ごされがちだった「情動」や「感覚」に焦点を当て、それらをマルチモーダルに記録・分析・共有することを通じて、主観性の再評価を試みる実践的研究です。研究者や実践者が現場で感じる戸惑い・直感・共感の揺れ——ふだんは議論の外側に押し出されがちな「情動の層」を、言葉に先立つ感覚素材(短い映像片、音、写真、身振り)で共有し、そこから対話を立ち上げる方法(センサリー・ダイアログ)を活用します。

この実践は、映像を「分析の対象」ではなく、感情と認識の間を媒介する装置として用い、「科学知の背景にある人間的揺らぎ」を記録する試みです。セッションは必ず撮影・録音し、表情や声色、間合いなどの非言語データも残します。後段でAIがそれらを可視化し、当事者の語りと突き合わせて再検討するのがポイントです(AIは「判定装置」ではなく、批評を促す媒介として使用)。

・プロジェクト・メンバー

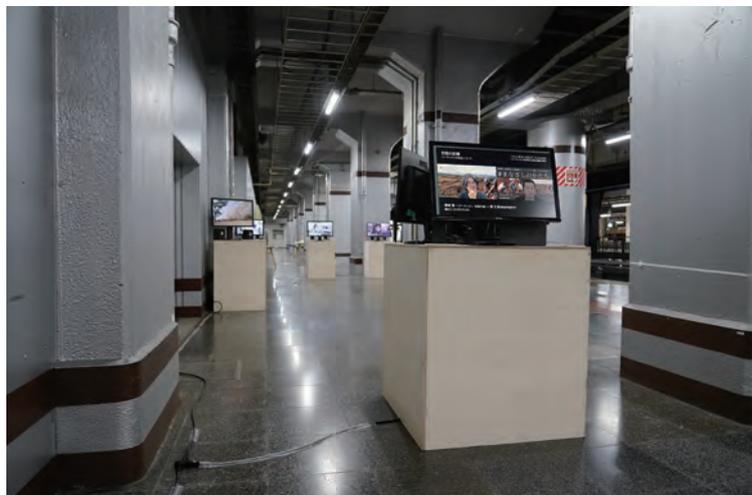
代表者：澤崎賢一、共同研究者：一ノ瀬 俊明(地理学・都市環境学/国立環境研究所)、石河 睦生(医用工学・人間工学/桐蔭横浜大学)、湊 丈俊(表面界面科学/分子科学研究所)



企画展「ファンダメンタルズ フェス (2021-2023)」東京大学駒場博物館での展示の様子
3名の研究者のラボのディテール(研究の詳細というよりも研究者の人間性)を映像で記録し、併置した映像インスタレーション



「ファンダメンタルズ」A4 チラシ



JR 上野駅で開催された「ファンダメンタルズ」展覧会の様子
澤崎(アーティスト)×3名の科学者の対談映像を展示



映画『#まなざしのかたち』を科学者が鑑賞後、
澤崎と各科学者が対談

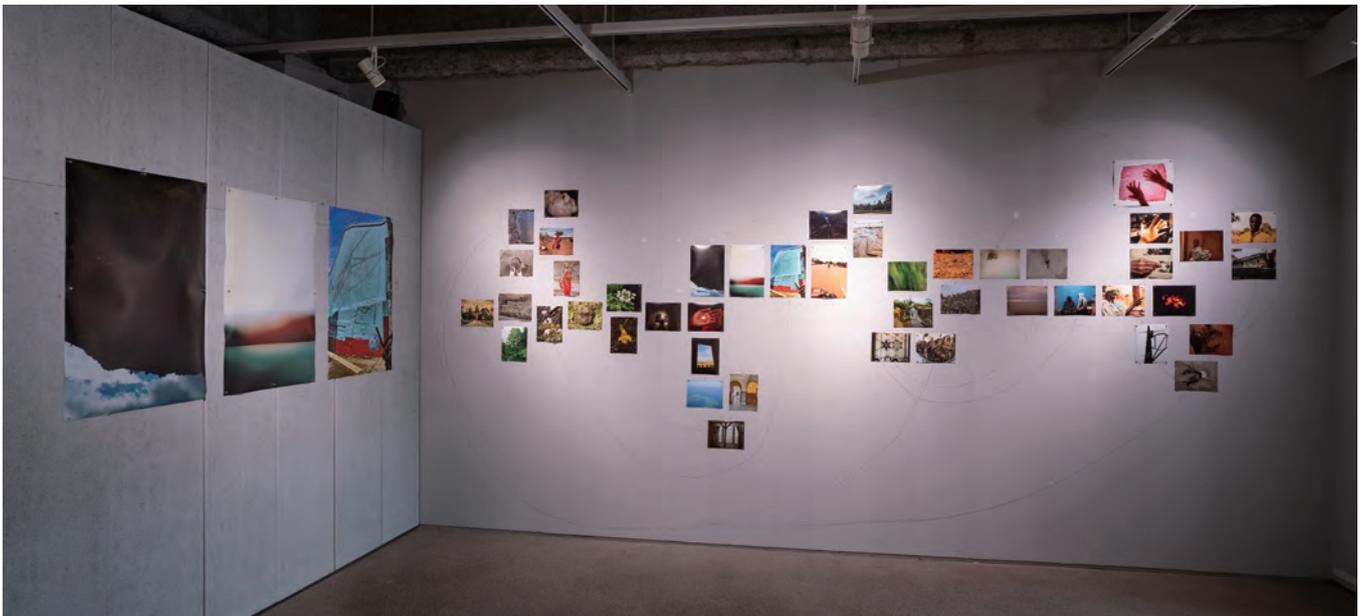


各科学者の研究室や調査地に澤崎が赴き、
研究の現場で各科学者の研究

・関連作品 展覧会「語りあう／あわないイメージたち」(Tosei Kyoto Gallery、京都、2021年)

「センサリー・ダイアログ」と関連する事例として、展覧会「語りあう／あわないイメージたち」(Tosei Kyoto Gallery、京都、2021)がある。この展覧会では、私が画家と文化人類学者と共に3名で「写真を使ったイメージのみによる対話」を試みた映像インスタレーション作品を発表した。

・ウェブページ：<https://livingmontage.com/image-correspondence/>



展覧会「語りあう／あわないイメージたち」展覧会会場の様子



〈センサリー・ダイアログ〉は、すでに高校～大学のワークショップや大学院授業に応用
上記は、室蘭工業大 × シュタイナー学校のワークショップで〈イマジナリー・ダイアログ〉を実践している様子

イマジナリー・ダイアログ

■プロジェクト「イマジナリー・ダイアログ：映像・AI・芸術による参加型「問い」創出の学際的实践」

〈イマジナリー・ダイアログ〉とは、「まだ実装しない／結論に収束させない」ことを意識的に維持し、想像上の計画や仮説を映像と言葉で仮に立ち上げる場の設計です。〈センサリー・ダイアログ〉で生まれた共鳴を踏まえつつ、あえて「実践の手前」に留まりながら、複数の可能性が共存する状態を共有します。その過程は記録され、後段のAI可視化と当事者の再語りりで往復的に更新されます。

2025年4月より私が代表者として、人間文化研究機構(人文機構)の共同研究プロジェクトとしてスタートしました。人文機構6機関に所属する研究者(芸術実践論、人類学、文学、建築、言語学、メディア研究など)らと共同実践を行うプロジェクトです。研究計画の実装に急がず、むしろ構想や対話の段階にとどまることの創造性と知的潜勢力に着目し、想像上の研究プランをめぐる対話を映像で記録・共有・再解釈するという新たな方法論の枠組みを提示しています。

・プロジェクトメンバー

代表者：澤崎賢一、共同研究者：大場豪(建築学、人間文化研究機構)、工藤さくら(文化人類学、国立民族学博物館)、河田翔子(中世説話文学、国文学研究資料館)、駒居幸(日本近現代文学、国際日本文化研究センター)、横山晶子(言語学、国立国語研究所)



・【関連企画】地球研 × 九州大ワークショップ

「アートとリサーチを横断する表現者たちによる共創の可能性」

(FabCafe Kyoto、京都、2025年7月)

アートと研究の境界を越えた協働の方法を探るワークショップ。前半は異分野の表現者による実践事例の共有、後半は映像とAIを用いる〈イマジナリー・ダイアログ〉で、協働の萌芽モデル／新たな問い・企画構想／社会共創型の連携モデルを可視化する。終了後は、立ち上がったプロジェクト案・キーワード・ビジュアルメモ等を整理し、今後の対話と協働に活かす。

・企画：澤崎 賢一、横谷 奈歩(美術家／九州大学芸術工学研究院)

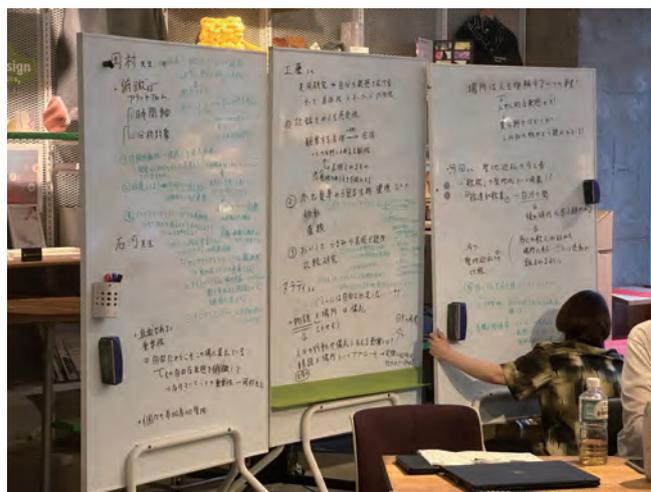
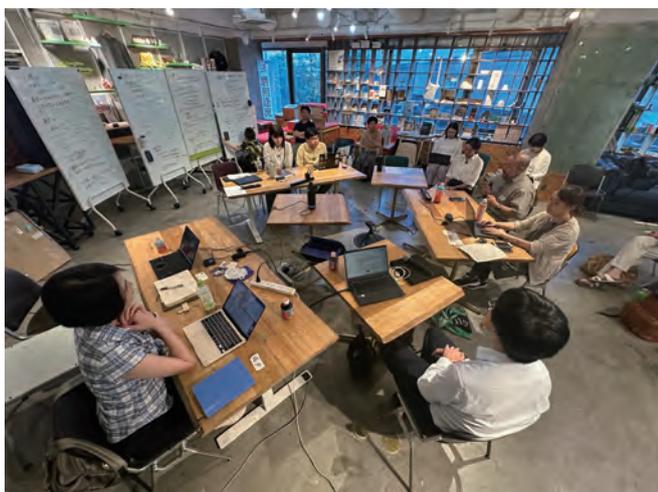


地球研 × 九州大ワークショップ当日の様子

■人文機構ワークショップ「異分野間で構想する共同研究の可能性——そのバリエーションをひらく対話の場」
(FabCafe Tokyo、東京、2025年8月)

人文機構の人文知コミュニケーターを中心に、自然科学・人文学・社会科学・芸術の研究者が集い、実装を急がない構想段階にあえてとどまる〈イマジナリー・ダイアログ〉を展開。各自の共同研究案を短く提示→質疑→相互コメント→1-3案を選定して即興的にふくらませ、新たな問い・構想の可視化を目指す。ワークショップ後は、プロジェクト案・キーワード群・ビジュアルメモ等を整理・アーカイブ化し、今後の学際協働の資源とする。

・企画：澤崎 賢一



人文機構ワークショップ当日の様子

- ・筑波大学の授業のために参考事例として実施したワークショップの記録映像
タイトル「異分野間の共同に向けてのコミュニケーションのあり方を考察するためのワークショップ」
テーマ「学際的な共同研究の可能性を探る」

2024年度には、筑波大学大学院における授業「人文知コミュニケーション」にて本手法を先行的に導入し、異なる専門背景を持つ大学院生たちが、記録映像や非言語的感覚をもとに協働的に問いを創出する実践型の教育も展開。

映像リンク：<https://youtu.be/wKlApQM0WM4>

■【メタ／コモンズ映画】KLASICA&NIST との共同研究プロジェクト

KLASICA (Knowledge, Learning and Societal Change Alliance) のメンバーとの共同研究プロジェクト。ハリケーン被災地(ドミニカ国／プエルトリコ)を対象とするアメリカ国立標準技術研究所(NIST)のレジリエンス研究に、住民・研究者・行政が相互に撮る→クラウドで共有→各自が編集→小上映→再編集を回す映像運用＝〈メタ／コモンズ映画〉を組み込み、「語るべき物語」を当事者自身が再構築するプロセスを意思決定に接続する方法論を開発。ナラティブ表現が合意形成・行動設計に与える影響を実証的に検討する。

・プロジェクトメンバー

澤崎賢一、イラン・チャバイ (KLASICA 議長／アリゾナ州立大学ワシントン D.C. センター 特任教授)、ジェニファー・ヘルゲソン (KLASICA 共同ディレクター／アメリカ国立標準技術研究所リサーチエコノミスト)、デビッド・マッグス (KLASICA 共同ディレクター／メトカルフ財団 芸術と社会フェロー)

■共著論文：Ilan Chabay, Jennifer Helgeson, David Maggs, Kenichi Sawazaki “Art, Culture, and Climate Science for Enhanced Community Resilience and Sustainable Futures”

※査読付き国際ジャーナル「Environmental Research: Climate」へ投稿し、審査中



KLASICA メンバーとのオンラインディスカッション

・若手研究者海外派遣プログラム

2024年8-9月、人文機構の若手研究者海外派遣プログラムの支援を受けて、2024年8~9月の1ヶ月間、ワシントン D.C. に滞在し、KLASICA のメンバーとの度重なるディスカッション、アリゾナ州立大学および NIST の研究者たちとの研究会などでの交流を経て、本プロジェクトを開始した。

・報告レポート：「アメリカでの研究実践を振り返る」

NIHU 若手海外派遣でワシントン D.C. に滞在中、映像を紹介するものではなく、意思決定を支える共通の作業面として用いる枠組み〈メタ／コモンズ映画〉を精緻化した。KLASICA (イラン・チャバイ)、NIST (ジェニファー・ヘルゲソン)、ASU Decision Theater と協働体制を築き、災害レジリエンスへの適用を具体的に議論。あわせて、効果の評価指標(定量×ナラティブ)、方法の一般化、情動や感覚などセンサリーな側面の扱いを主要論点として整理した。成果として共著論文の執筆を進めるとともに、現地での実践に向けた応用的方法論を設計中である。

ウェブリンク：<https://note.com/texsite/n/n5dac1aea113d>



NIST コミュニティ・レジリエンス・グループでの研究会の様子(発表者は澤崎)

■【コモンズ映画】国際学会「AAS in Asia (Association for Asian Studies) 2025」

(2025年6月、カトマンズ・ネパール)

2025年、カトマンズで開催された国際学会 AAS in Asia のパネル発表にあわせ、人文機構の研究者らと登壇メンバー全員で相互撮影を行い、〈コモンズ映画〉を現地実装した。会期中は相互撮影→クラウド共有→各自編集→日次ミニ試写→再編集の短サイクルを回し、撮影者・被写体・文脈・公開範囲のメタデータ付与と自己省察的なボイスオーバーの収録と編集作業を行っている。これにより、学会という一過性・多言語の環境で、記録に留まらず参加者自身が語りを編み替える多声的運用の有効性を検証している。派生する映像作品は、国際学会「カルチュラル・タイフーン 2025」(台湾)での上映・発表が決定している。



「AAS in Asia 2025」発表の様子



ネパールで「コモンズ映画」を実施したメンバー

・【メタ／コモンズ映画】

プロジェクト「科学とアートの協働を語る—異分野連携における実践知と感情の質的分析」(地球研 所長裁量経費)

本研究は、地球研 × 金沢 21 世紀美術館の連携展（「すべてのものとダンスを踊って」ほか）に関わった研究者・キュレーター計 7 名へのインタビューを基に、協働の現場で生じた判断・葛藤・感情の動きを質的に記述・分析する試みです。理念としての「共創」ではなく、何が起き、どう感じ、どんな学びが生まれたかを当事者の語りから抽出し、今後の異分野協働の制度設計・方法論・倫理に資する知見を示します。

方法は逐語起こしの上でのナラティブ分析／感情分析に、STS の概念（バウンダリー・オブジェクト、翻訳、共創の困難さ）を参照。さらに、新城竜一・本橋仁・澤崎賢一による与論島・沖永良部島での共同撮影と共同編集を「コモンズ映画」として事例化し、完成映像を成果とすると同時に、その制作プロセス自体を分析対象とします。本研究は、STS／マルチモーダル人類学／環境人類学／芸術実践論を架橋し、展示やアート表現を介した「公共知の創出」に向けた実践的手がかりを提供します。

・プロジェクトメンバー

代表者：澤崎賢一、研究協力者：本橋仁（金沢 21 世紀美術館）、新城竜一（地球研・LINKAGE プロジェクト代表）、大山修一（地球研・有機物循環プロジェクト代表）、林健太郎（地球研・SusN プロジェクト代表）、渡邊剛（地球研・SceNE プロジェクト代表）、吉川成美（地球研 上環境日本学センター・センター長）、阿部健一（地球研）



金沢 21 美の展示に関わった地球研研究員へのインタビュー



与論島・沖永良部島でのフィールドワークの様子